

たかが陶芸、されど陶芸 唯一無二の作品作り

ML 工房は、30 年を越える歴史と実績を兼ね備えた唯一無二の陶芸クラブであると自負しています。また、当クラブの会員は、30 代から 90 代と幅広い年齢層だけでなく、近隣の市町村に住まわれている方もおられる極めて開かれた集まりでもあります。

陶芸を楽しむということは、食器など(茶碗、花器、コーヒーカップ、皿、置物など)の陶器を作る術を習得し、自分だけの作品を作り上げる喜びを享受することと言えます。

この陶器をつくる陶芸とは、使う素材、作る方法などがさまざまに極めて奥が深い術と言えます。この機会に陶芸とはについて紹介しますので、陶芸の全体像を感じて頂き、興味を持って頂ければ幸いです。



① 陶器ができるまで

陶器を大きく分類すると、粘土(土)から作られる、いわゆる陶器と、石を砕いたものから作られる磁器があります。当クラブでは主に粘土を使った陶器を作成しています。

薄くて白く冷たい感じがするのが磁器(量販店等で食器として売られているものの多くは磁器です。)、厚みがあって暖かい感じがするのが陶器です。

この陶器の作り方ですが、まずは粘土を使って器や装飾品等の形を作ります。これを成形と言います。この成形された作品を良く乾かし陶芸用の窯で 800 度程度で(8 時間ほど)焼きしめます。これを素焼き焼成と言います。

この素焼きされた作品に釉薬(水漏れ等を防ぐコーティングのようなもの)を塗り、1250 度程度で(約 12 時間)焼きしめます。これを本焼き焼成と言います。

これでようやく陶器が出来上がります。

この成形から焼成までには最低でも1か月ほどかかります。

② 成形の術

成形の方法としては、粘土の塊を手で変形し作り上げる玉づくり、粘土の塊を道具等を使ってくりぬいて作り上げるくり貫き、粘土の紐を作りそれを重ね合わせて作りあげる紐作り、粘土の板を作りそれを変形させたり張り合わせるにより作りあげるタタラ作り等があり、それらを総称して手びねり成形と言います。また、電動のろくろを使って成形する電動ろくろ成形や、通常の工房などでは一般的ではありませんが、器の型(鋳型)に泥しよう(粘土を水等で溶かしたもの)を流し込み、同じ形のものを作り上げる鋳型成形等があります。

これらの方法は、作りたい作品に応じて使い分けます。

③ 装飾の術

一般的に装飾と言いますと器などに描かれる絵や文字等(一般的には素焼きした作品に陶芸用絵の具を使って描きます。)を思い浮かべると思いますが、陶芸における装飾方法として、成形時に様々な模様を刻み込む方法等もあります。

成形時の装飾方法としては、削り装飾・組み立て装飾・化粧泥装飾等と様々な術がありますが、全く独自の創意工夫で、しかも独自の道具を使って装飾されているのが一般的です。



④ 酸化焼成と還元焼成

一般的にですが、焼成方法には、完全燃焼による酸化焼成と不完全燃焼による還元焼成があります。

釉薬にもよりますが、同じ釉薬を使っても、酸化焼成と還元焼成では作品の風合いが全く違ってきます。例えば、酸化焼成では薄いブルー系になるのに対し、還元焼成では鮮やかな朱色系になるなどです。

⑤ 粘土と施釉

私たちが扱う粘土や釉薬には様々なものがあります。

私たちが使う粘土は主に益子粘土、信楽粘土、唐津粘土、備前粘土などですが、それらにも白系粘土、赤系粘土、黒系粘土等様々なものが市販されております。また、近場で見つけた地元の粘土を使うこともあります。

また釉薬にも、赤系、白系、黒系、青系、マット系等色々ですが、同じ釉薬でも使った粘土が異なれば見え方(風合い)も大きく変わります。勿論、釉薬を薄くかけたか厚くかけたか等でも大きく異なりますし、焼成の仕方でも大きく変わります。

⑥ 陶芸窯

陶器を焼き上げる陶芸用窯には、電気窯、ガス窯、灯油窯、穴窯、登り窯等があり、どの窯を使うかでも作品の仕上がりは大きく変わります。

当会では、焼き方に創意工夫ができる灯油窯を使っています。

このように、陶芸は自分の創意工夫が存分に生かすことのできる唯一無二のものと感じています。そして、でき上がる作品(実用品、装飾品等)も唯一無二のものと言えます。別な言い方をすれば、全く同じものが作れないということでもあり、それが大きな魅力でもあります。